

『音楽についての対話』 「序文」 (11世紀) 翻訳

西間木 真

[解説]

紀元千年頃にイタリア北部で執筆された『音楽についての対話 (*Dialogus de musica*)』(以下『対話』)は、これまでに確認された55写本のうち9写本において同一の「序文」をともなっている¹。この「序文」は新しい記譜法に基づくソルフェージュ教育の成果、典礼聖歌レパートリーの検証、典礼聖歌集の編纂について書簡の形で簡潔に述べたものであるが、その内容および語彙や表現、文体から従来『対話』ではなくアレツォのガイド(990頃～1033以降)と関係づけられてきた²。実際「序文」で言及されている新記譜法は、『対話』で紹介されているA-G式アルファベット記譜法ではなく、ガイドによって考案された譜線記譜法と考えた方が全体の筋が通る。また修道院での教育活動から聖歌レパートリーの検証、聖歌集の再編纂といった一連の活動についての記述は、ガイドが『修道士ミカエルへの書簡』前半で述べているポンポーザ修道院(Abbazia Santa Maria di Pomposa)での出来事と合致する³。

しかしガイドの著作と共に書写されているのは9写本のうち4写本(Br3、Lo2、Mi3、Pi)にすぎない。また少なくとも3写本(BI1、P1、P8)は「序文」と『対話』のみをおさめた冊子(*libellus*)であり、テキスト伝承の上ではガイドの著作集からは独立している。「序文」の成立や『対話』に書き加えられた経緯について詳細は不明だが、『対話』の最も古い状態を伝えているロンドン写本(Lo2)に書写されていることから⁴、ガイドによる譜線記譜法の考案後におそらくイタリアで執筆され、その後『対話』の「序文」とみなされて伝播したと考えられる⁵。

¹ 西間木真「『音楽についての対話』(1000頃) 解題と翻訳」『エクフラシス』11(2021)、85-104頁。中世史料の「序文」については、J. Hamesse (dir.), *Les prologues médiévaux*, Turnhout, 2000 (Textes et études du moyen âge, 15)を参照。

² Cf. J. Smits van Waesberghe, *De musico-paedagogico et theoretico Guidone Aretino eiusque vita et moribus*, Firenze, 1953, p. 81-85 ; H. Oesch, *Guido von Arezzo. Biographisches und Theoretisches unter besonderer Berücksichtigung der sogenannten odonischen Traktate*, Bern, 1954, p. 76-77 ; M. Huglo, “Der Prolog des Odo zugeschriebenen „Dialogus de Musica“”, *Archiv für Musikwissenschaft*, 28 (1971), p. 134-146.

³ Cf. Smits van Waesberghe, p. 81-85 ; Oesch, p. 74-75.

⁴ Cf. Chr. Meyer, “Une anthologie au carrefour des savoirs et des cultures”, in : *Sciences du quadrivium au Mont-Cassin. Regard croisés sur le manuscrit Montecassino*, *Archivio dell'Abbazia 318*, dir. L. Albiero, I. Draelants, Turnhout, 2018, p. 159-193, part. p. 165, n. 24.

⁵ M. Huglo, “L’auteur du <Dialogue sur la musique> attribué à Odon”, *Revue de Musicologie*, 55 (1969), p. 121, n. 2.

一次史料(系統別)

イタリア系 1

Lo2 London, British Library, Add. 10335, f. 14v-15r (s. XII)

Mi3 Milano, Biblioteca Ambrosiana, D. 455, f. 21r-v (s. XVI)

イタリア系 2

Bl1 Berlin, Staatsbibliothek, MS lat. 8° 265, f. 9r-v (s. XII)

Le3 Leipzig, Universitätsbibliothek, 1492, f. 107r-v (1438)

P8 Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 3713, f. 30r-v (s. XIII)

Pi Pistoja, Biblioteca Capitolaria, 100, f. 39r-40r (s. XII)

ヨーロッパ西部系 1

Br3 Bruxelles, Bibliothèque royale, II 784, f. 42v-43v (s. XIII)

P1 Paris, Bibliothèque nationale de France, lat. 7211, f. 106r-v (s. XII) [= GS1]

Ro2 Roma, Biblioteca Vaticana, Reg. lat. 1146, f. 24r-25r (s. XIV)

エディションおよび現代語訳

M. Gerbert (ed.), *Scriptores ecclesiastici de musica sacra potissimum ex vatis Italiae, Galliae et Germaniae codicibus manuscriptis collecti et nunc primum publica luce donati*, vol. 1, St. Blasien, 1784 / repr. Hildesheim, 1990, p. 251-252 ; repr. in : *Patrologiae cursus completus, series latina*, éd. Jacques Paul Migne, t. 133, Paris, 1853, col. 757-760 [= P1].

M. Huglo (ed.), "Der Prolog des Odo zugeschriebenen „Dialogus de Musica“", *Archiv für Musikwissenschaft*, 28 (1971), p. 134-146 ; repr. in : M. Huglo, *La théorie de la musique antique et médiévale*, Aldershot, 2005.

L. Ludovica de Nardo (ed., trans.), *Il Dialogus de musica*, Udine, 2007, p. 70-73.

C. J. Williams (trans.), "Guido on Guido : the dialogues in Ms. Harley 281", 38th National Conference of the Musicological Society of Australia « Musical Dialogues », Sydney, 1-4 October 2015 [on line].

Chr. Meyer (trans.), S. Nishimagi (ed.), *Dialogus de muscia* [in preparation].

*

【序文】

1 あなた方が熱心に求めるため、親愛なる兄弟たちよ、音楽 (musica) に関する規則をいくつか、子供や普通の人々 (simplices) でも知ってさえいれば神さまのご加護を得て歌うための完全な能力をすぐに習得できるだけの十分な事からのみを、あなた方にお伝えしてきました。2 その結果、ご要望が達成されたことをみずから耳で聞き、目で見、確かな証拠で確認しておられます。3 事実、あなた方と共におかれた私は、この科目 (ars) についてひとえに神さまのお力添えを

得てあなた方の子供や若者の幾人かに教授しましたところ、4 ある者は3日間、ある者は4日間、ある者は1週間、この科目の訓練を受けただけで、5 多くのアンティフォナを、他の人から聴くのではなく罫に沿った表記 (regulari descriptione) のみを抛りどころとしてひとりで学ぶだけで、わずかのうちに躊躇せず発声できるようになりました。6 さらにさほど日数をかけずとも、初めて見てその場ですぐに、楽譜 (musicas notas) に記されたものであれば何であれ、間違えずに歌えるようになりました。7 これまで普通の歌い手では、その多くが歌の実践と勉強に50年もの年月を無益に耐えようとも、このようなことが達成されることは決してありませんでした。

8 我々の理論 (doctrina) がすべての聖歌に通用するものかどうか入念かつ細心の注意を払って吟味しようとなさる方々によって他の歌手たちと比して完璧であるとみなされた兄弟が抜擢なされましたので、その方と共に聖グレゴリウスの聖歌集 (antiphonarium) を念入りに精査したところ、そこではほぼ全体が規則通りであることが明らかになりました。9 無能な歌手たちのために損なわれたいくつかの曲については、そうではない少なからぬ歌手たちの証言をもとに規則の権威に則して修正されました。10 ごくまれに、より長い聖歌において楽音が他の旋法にまでおよんでいるもの、つまり規則に反して過剰に上昇されたり、あるいは下降されたりしているものを見出すこともありますが、それらは慣用の全ての聖歌から一様に認められるものであるため、あえて修正はいたしませんでした。11 実際、一曲ずつ我々は記譜し (notare)、規則の真正さを希求する人たちに疑念を抱かせないようにつとめました。

12 こうしたことが達成されるとあなた方はより大きな熱望にかられ、厳格な祈りと戒心をもって神さまとその聖母マリアさま——その方を尊ぶためにこの修道院はなされたのですが——を讃えるために規則を整備し、同時に有益な音符 (nota) を使って聖歌集 (antiphonarium) 全体が「旋法の定型 (tonorum formulae)」と共に書写されるように取り組みました。13 こうした次第で私はあなた方の善行と祈願に信頼をよせ、また共通の父からの光栄なる指示にしたがってこの仕事を投げ出そうとは思いませんし、ないがしろにもいたしません。14 この世の賢人たちにおいてもこの科目の教えは難しく、奥深いものです。15 こうしたことを望ましいと思う人は、精一杯の力を注いで畑を耕し、見回りを怠らぬようにしなさい。16 神さまのこのささやかな贈り物を見ずから理解できる人は、わずか一つの実りであっても平安で満たされることでしょう。17 これらのことをより良く理解するためにあなた方のお志に必要とお考えであれば、あなた方のどなたかお一人、質問をするためにあるいは対話をするためにお越しく下さい。主があたえたもうものにしたがって、その方にお答えすることを私はなおざりにはいたしません。

【注】

5 “regulari descriptione” が「規則にしたがった説明」ではなく「罫線を用いた表記」、つまり譜線記譜法を意味する可能性については、H. Oesch, *Guido von Arezzo. Biographisches und Theoretisches unter besonderer Berücksichtigung der sogenannten odonischen Traktate*, Bern, 1954, p. 74-75 を参照。

7 Cf. Agobardus (Acker, CCCM 52, p. 350) ; Guido Prol. (Pesce, p. 408, l. 10-14).

9-10 旋法の逸脱や旋律の書き換えについては、Ch. M. Atkinson, “The Parapteres: ‘nothi’ or not?”, *The Musical Quarterly*, 68 (1982), p. 32-59 ; id., “From ‘Vitium’ to ‘Tonus acquisitus’: On the Evolution of the Notational Matrix of Medieval Chant”, in: *International Musicological Society Study Group Cantus Planus. Papers read at the Third Meeting Tihany, Hungary, 19-24 September 1988*, Budapest, 1990, p. 181-197 等を参照。

12 「旋法の定型 (formula tonorum)」は、『対話』では各旋法で用いられる楽音、つまり音組織(音階)を意味し、文脈からこの記述に合致しない。*LmL* ではこの「序文」の用例をガイドと同様に、各旋法の旋律パターンを識別する旋律定型 (nonanoe 型もしくはアンティフォナ型) と解している。Cf. M. Bernhard (ed.), *Lexicon musicum latinum medii aevi*, fasc. 9, München, 2007, col. 103. しかし聖歌集全体に書き加えられる定型であれば、小栄唱(頌栄 doxologia) *Gloria patri et filio* を締めくくる “seculorum amen” の旋律パターン (euouae 型) と考えた方が自然ではないか。nonanoe 型もしくはアンティフォン型の旋律定型は、トナリウスとして聖歌集に付随することはあっても聖歌集そのものの中に書き込まれるものではないからである。“formulae tonorum (modorum)” を euouae 型の意味で用いている例は、*LmL* によると 11-12 世紀にイタリアおよびフランス地域で書かれたガイド関連の理論書およびトナリウスにみられる。

ガイドが音楽教師として過ごしたポンポーザの修道院は聖母マリアの名を冠しており (Abbazia Santa Maria di Pomposa)、修道院長は同名のガイドであった。Cf. Guido ep. (Pesce, p. 452-454, l. 64-74) ; G. Morin, “Guy d’Arezzo ou de Saint-Maur des Fossés (d’après plusieurs textes inédits)”, *Revue de l’art chrétien*, 4^e série, 6 (1888), p. 333-338, part. p. 337.